

■（１５８）新聞の「白銀の世界」は警告のシグナル

首都圏は２週続けての大雪で、電車などの交通機関が乱れた。おさまった後のヘリコプターからの空撮写真はまた、めったに見られない白銀の世界だろう。歩くと大変な足元のこととは忘れて、巨大な白布に覆われたような高層ビル群に目を奪われるに違いない。

そんな「真っ白」な世界。新聞界にはあり得ない。どのページも紙面の枠にぴったり収まっており、１行たりとも空白はまずない。取材記者は自ら必要だと考える行数で原稿を自由に書いてくる。それらを枠に並べると、全体で行数が足りなかったり、逆に紙幅からあふれたりする。そこで、編集を担当する整理記者が職人技を繰り出す。コンピューター画面で紙面イメージを見ながら、「あと２行削って」「さらに３行追加して」などと指示してくる。取材記者は要望に応じて原稿に手を入れる。削ったり、足したりできなくなる時もある。整理記者は写真の大きさを触る。そうやって、ある意味で美しい紙面ができていく。

世界では時々、一部白紙の新聞が登場して話題になる。編集ミスではない。言論の自由が脅かされていることへの抗議が多い。新聞界の白銀は「警告」のシグナルなのです。（山）